

# 財団法人富民協会農業博物館の建築について

橋寺 知子

関西大学環境都市工学部准教授

## 1. はじめに

本稿では浜寺公園内に1932（昭和7）年に建設された農業博物館の建築を扱う。

1936（昭和11）年に刊行された『近代建築画譜』<sup>(1)</sup>は、近畿の近代建築の質の高さと幅広さを伝える書籍（写真集）であり、昭和戦前期までの近代建築を振り返るには欠かせない。掲載物件には現存する建築も多いが、今はなく、しかし斬新な意匠で目に留まる建築も多い。農業博物館はその一つである。白い矩形の建築で、水平線が強調されたモダンなデザインであり、最先端のデザインを目指した博物館建築とうかがえる。財団法人富民協会が設置した日本初の農業博物館である。富民協会は、大阪毎日新聞社の社長である本山彦一が設立に深く関わる団体で、農業博物館は浜寺の本山邸の隣接地に建設された。これまで研究論文ではほとんど取り扱われてこなかった建築であり、はっきりしない部分も残るが、その概要をわかる限り述べていきたい。

## 2. 農業博物館の概要

農業博物館は、1932（昭和7）年7月に竣工し、当時、複数の建築専門雑誌に掲載されている<sup>(2)</sup>。それらの記載内容から建築の概要を示す。

基本的な情報が詳細に掲載されているのは、日本建築学会の会誌『建築雑誌』1933年2月号である。

位置	大阪府泉北郡高石町濱寺公園内
敷地面積	616坪1合4勺
建坪	357坪2合3勺
延坪	908坪4合3勺
構造	鉄筋コンクリート造
様式	日本インターナショナル式（府当局の希望加味す）
階数	3階一部2階（一部半地中階附）
高さ	軒高（地上よりパラペット上部迄）48尺 屋上部迄80尺5寸 旗竿頂点迄83尺
工程	昭和6年12月28日地鎮祭举行 同7年1月5日起工 同年7月10日竣工
従業延人員	約12,000餘人

設計及監督 工学士 中尾保  
現場員 北川菊次  
施工 株式会社大林組  
現場主任 川上要

敷地面積約 2,000 m<sup>2</sup>、長手が約 70m、短手約 17m の鉄筋コンクリート造 3 階建て、延面積約 3,000 m<sup>2</sup>、軒高約 14.5m、最高高さ約 24m の建物である。主構造は鉄筋コンクリート造だが、3 階大集会室の屋根には鉄骨トラスが架されている。暖房は蒸気暖房で、地下に汽罐室があり、室の体積や所要温度に応じてラジエータを配置した。給水は井戸水を屋上に揚水し、各階の手洗・便所へ配水、便所は水洗式であった。

建築専門雑誌の記事のみならず、財団法人富民協会が発行した印刷物でも、配置図や周辺の地図の記載がない。「浜寺公園内」と記載されるだけで、広い浜寺公園のどこなのか、明確には記されていない。図面には方位記号がなく、立面図は、長手の 2 面は「正面」、「背面」と表記されている。短手の 2 面には「北面」、「南面」との記載があるので、南北方向に細長い矩形の建築で、正面が西側を向いた配置と判断することができる。大阪市立中央図書館に『浜寺公園案内』という 1936 年頃のパンフレットが所蔵されている(図 12)<sup>(3)</sup>。そこに掲載されている浜寺公園の地図に、農業博物館という記述があり、場所が確定できる。これらを合わせて考えると、西側(海浜側)を正面とし、浜寺公園を前庭とするような配置の建物ということになる。

写真の通り、この建築は、「モダニズムの建築」を目指したものである(図 1)。白色で装飾の少ない矩形の外観、強調された水平のラインがそれを物語る。平面は南北に長い矩形平面で、階段室が中央東側と北端の東西両側に 2 ケ所、南端東側の合計 4 ケ所にある(図 3～5)。北端東側にはエレベータも 1 機、備えられている。1、2 階が農業博物館展示室、3 階は大集会室と本山彦一の考古資料を展示する本山考古室がある。正面(西側)には 3 ケ所の出入口が設けられており、中央が農業博物館へのメインエントランス、南側は事務室への出入口となる。北側の出入口は農業博物館展示室へも通じるが、そのまま 3 階へ進めば本山考古室や講演会等に利用された大集会室へ直結する。3 階の大集会室は、両側に大きな開口部が設けられ、天井高が高く、ハイサイドライトも設けられた非常に明るい空間であった。西面、つまり海岸側には「ベランダ」が配され、海辺の風景や潮風も楽しめる場であったと想像できる。3 階の南側半分も、広いバルコニーとなっている。大集会室は階高が高く、その部分は勾配屋根となっている。航空写真を見ると、3 階の本山考古室や予備室の上部は平らな屋上になっており、3 階南のバルコニーから直線階段でも上がれるようになっている(図 11)。この直線階段は、モダニズムのデザインとして見せ場の一つであったと思える。

シンメトリーな構成をとらず、中央の出入口も簡素であり、内部の展示室の写真を見ても、明るく合理的な空間を第一とした、典型的なモダニズムの建築だが、外観で特徴的なのは、1 階窓上の軒のような突出部と 3 階の屋上手摺の上部、そして大集会室の勾配屋根に瓦が葺かれていることである(図 11, 12)。『新建築』に中尾の言葉が引用されている。「この建築の様式は純然たるインターナショナルではありません。屋根や軒先にスパニッシュ瓦を載せたのは大阪府當局からの命令で止

むなくつけ加えたのです。決して私の意図でなかったことだけをご了解願ひ度いのです。また講堂の屋根は鉄骨の上にスラブを張ったものでありながら五寸勾配の切妻としたことも府當局の希望に添うようにつとめた結果です<sup>(4)</sup>と、中尾にとっては、かなり不本意な意匠という感じが伝わる。『建築雑誌』に掲載した建築概要においても様式の欄に「日本インターナショナル式（府當局の希望加味す）」と注記している点も同様の思いからであろう。

農業博物館という種類の博物館は日本初だったようで<sup>(5)</sup>、展示の構成に関しては、「東京科学博物館の森金次郎氏や谷本富博士、岡實博士に教えを請ひ、富民協会の西村主事の指図によって設計したものです」と述べている。金森金次郎は東京教育博物館の学芸官であり、谷本富（たにもととめり）は教育学者で、1928（昭和3）年から大阪毎日新聞の顧問を務めていた。岡實は1927（昭和2）年に大阪毎日新聞の取締役役に就任、1932（昭和7）年には副社長を務めている<sup>(6)</sup>。新しいタイプの博物館を設計するにあたって、中尾は大阪毎日新聞と関わりがある学識経験者たちに意見を求めたようである。ただし、建築専門雑誌においては、展示室内の配置に関しては、何も記されていない。

終戦後、農業博物館は閉館し、建物は、1947（昭和22）年4月には高市町立中学校の校舎として利用された。高石中学校は1956（昭和31）年に現在地へ移転しているので、それまでは使われていたと考えられる。1962（昭和37）年の商工住宅案内図帳（住宅協会出版部）を見ると、当該の敷地には「大阪マツダ販売所 KK 羽衣寮」と記載されている。確認できた地図では1967（昭和42）年発行のものでも同じ名称が記載されている。1970（昭和45）年発行の『高石市精密住宅地図』（吉田地図）では「羽衣パークホテル」に変わる。ホテルとしての利用がいつまで続いたのかは不明だが、1974（昭和49）年の住宅地図では「大阪府立羽衣青少年センター」と記載され、1998年発行の地図まで続き、2001年の住宅地図では空地になっている。大阪府立羽衣青少年センターは、1997年10月に浜寺公園内の別の場所に新築・移転したので、1998年から2000年ごろまでの間に解体されたと考えられる<sup>(7)</sup>。

### 3. 設計者・中尾保と農業博物館

設計者の中尾保は、日本の近代建築史上では昭和初期のモダニズム芸術運動の一つとして注目される「日本インターナショナル建築会」の主要なメンバーとして名前が知られている。この会や、会員たちに関しては、笠原一人らの研究に詳しい<sup>(8)</sup>。先行研究を参考にしつつ、中尾保がなぜ農業博物館と関わることになったのかを探る。

中尾保は1894（明治27）年に堺に生まれ、大阪府立堺中学校を卒業、早稲田大学に進学し、1923年に理工学部建築学科を卒業している。通常、建築学科を卒業すると、官庁営繕や建築事務所、建設会社等に就職し、キャリアを積むことが多いが、中尾は卒業と同年に「大阪毎日新聞嘱託、大阪市立工業学校講師嘱託」という履歴になっている。中尾の経歴は多彩である。戦前期は、インターナショナル建築会の中心的な役割を担い、前衛的な建築家としての一面をもつ。実現した作品としては、日本初のラグビー場である花園ラグビー場や阪急西宮球場などがある（図13、14）。卒業と同時に工業学校の講師になっているが、それ以降も関西高等工学校教授、そして西日本初の私学の

高等工業学校である関西高等工業学校（大阪工業大学の前身）設立時には建築学科長に就任しており<sup>(9)</sup>、教育者としての業績も無視できない。インターナショナル建築会には関西高等工業学校の出身者も多く、教育を通じ、モダンな建築理論を広めた存在である。また戦後は、1951年に地元の高石町長に就任している。1963年、現役の町長のまま逝去した。

中尾のもう一つの顔として、日本泳法能島流の「師範」という肩書きがある。中尾は、大阪毎日新聞浜寺水練学校に少年時代から長年かかわってきた。1907（明治40）年、中尾は高等小学校3年の時に水練学校に入学、研究科へも進み、1910（明治43）年、班長に任じられている。大学進学後も夏季には地元に戻って水練学校に関わっていたようで、1919（大正8）年には師範となり、1921（大正10）年は「顧問」だが、その1年を除き、亡くなる前年の1962年まで師範を務めている<sup>(10)</sup>。浜寺水練学校は、1906（明治39）年、大阪毎日新聞社が日露戦争戦勝の記念事業として、海事思想の育成と普及を目指し、浜寺に海泳練習所と海水浴場を開設したことに始まる。1922（大正11）年、学校規則を定め、水練場から「水練学校」となった。中尾保が大学卒業後、大阪毎日新聞社に深い関わりを持つのは、この水練学校の縁によるものと推測できる。大阪毎日新聞社長であった本山彦一は、浜寺水練場が浜寺水練学校へ改称した1922（大正11）年から、亡くなる1932（昭和7）年まで、浜寺水練学校の校長を務めた。また1915（大正4）年には浜寺公園内に本山邸が竣工している。明治末から浜寺水練場に入入りし、大学在学中にすでに師範であった中尾保は、本山彦一となんらかの面識があり、大学卒業後、大阪毎日新聞社の嘱託に任じられたと考えられる。書類上では確認できないものの、「建築顧問」として、大阪毎日新聞の事業において建築関連の仕事に関与したと考えられる。

中尾保の作品として実現したものには、先述した通りスポーツ施設が多く、デザインは、モダニズムである。花園ラグビー場は、1929（昭和4）年に竣工した日本初のラグビー専用グラウンドで、水平線が強調されたモダンな外観をしている<sup>(11)</sup>。また阪急西宮球場は、設計：中尾建築事務所（中尾保）、構造計算：阿部美樹志、監督：阪急工務課、施工：竹中工務店によるもので、意匠設計は中尾保と考えてよいだろう<sup>(12)</sup>。『建築と社会』1938年10月号には市立堺市民病院が掲載されている。設計：中尾保建築事務所、監督：堺市役所土木部技術課、施工：浅沼組で、モダニズムの地上3階建、鉄筋コンクリート造の病院建築である。各階には軒が付いており水平線が強調されている。

中尾保が熱心に活動したインターナショナル建築会の会誌『インターナショナル建築』には、会員たちの作品が多く掲載されているが、中尾保の作品は、実現したものでは花園ラグビー場しか掲載されていない<sup>(13)</sup>。だが、試案や計画図段階の作品は複数掲載されており、プールや海水浴場に関わるものも多い（図15～図19）。大阪毎日新聞社が編纂した『浜寺海水浴二十周年史』（1926年）には「浜寺海水浴場の将来」と題して中尾保の談話を掲載している。その中で「自分が海水浴場の設計を委嘱されたのは一昨年からであるが従来のやり方を変えて規模を少し大きくし海浜都市といった様なつもりで設計して見たがこれが実現したので非常に愉快になった、ただ遺憾とするところは、あれだけの設備を毎年取壊さねばならぬことである」と述べており、大正末頃から、夏季に仮設される海水浴場の諸施設をデザインしていたと推測できる。「白砂青松の浜寺に永久的海水



浴場の設備の生まれる時代が来れば、これを欧米のそれと比べて決して遜色なきまでに立派なものとなることを確信する」、また水練学校の将来に関しては、「生徒に競泳の指導をするのに完全な人工遊泳場即ちプールのないのは何といても遺憾である」<sup>(14)</sup>と述べている。『インターナショナル建築』に掲載された「ある海水浴場会館への試案」や「水泳倶楽部」、「水泳競技場」、「浜寺水泳場飛込台」、「浜寺水泳場」などのパースや図面<sup>(15)</sup>を見ると、恒久的な施設の計画準備が勧められていたのかもしれない。写真や記録を見る限り、それらの建設は実現していないが、描かれた施設は、鉄筋コンクリート造を前提としたモダニズムのデザインに見える。浜寺公園を中心とするエリアに、モダンな「海浜都市」を築く目論見があったのではないであろうか。農業博物館は、海水浴場の中心部からは少し南にずれているが、公園の一角にあり浜寺公園を構成する施設の一つとして考えたと思える。

#### 4. 昭和初期の浜寺公園の改修と農業博物館

浜寺公園は、1873（明治6）年に開園した、大阪府下では一番歴史の古い府営公園の一つである。浜寺は松の名勝として古くから知られていたが、明治30年に大阪一和歌山間に南海鉄道が開通し、保養地として注目される。この頃から公園内の土地が、料理旅館などに貸し出され、賑やかな場所となった。明治末には、府営公園内に有力実業家たちの別荘が建設された。「風光明媚な公園のなかの土地を茶店名義で借り受け、茶店のかわりに別邸を建設した」<sup>(16)</sup>。近代的な公園として、この状態は決して理想的ではない。「園内の住宅や別荘などの家屋が風致を害するばかりでなく利用上からも支障となっていて、（大正）12年にその住宅の移転整理計画がたてられた」<sup>(17)</sup>。公園内の住宅等に移転させるための国有地が払い下げられ、昭和初期には順次移転し、1931年3月に移転を完了した。これらの改革を推進されたのは、大阪府の公園課のトップに、造園や都市計画の専門家である大屋霊城が着任してからである。

大屋霊城は、公園に関する著書『計画・設計・施工 公園及運動場』（1930年）において、浜寺公園を日本の海浜公園の事例として高く評価している。そして、当時の浜寺公園の状況について、「浜寺公園は東洋第一の夏季海水浴場を包有する一大海浜公園で目下大阪府の管理に属し、近く園内の住宅約五十六戸を他に移転せしめ公園的施設を施すべく計画中である。内務大蔵両省に於ても府のこの計画を大いに推賞（マ）し、官有地約二萬坪を府に払い下げ住宅移転地に供すると同時に海浜地約四萬三千坪を無償貸与して公園としてこれを利用することを許容した」<sup>(18)</sup>と述べている。さらに今後の改良に関して数点の提案をしており、2番目に「公園内に残されたる茶店、料亭は成るべく日本風の建築様式を保ち乍ら周囲の風致に十分の調和をなすよう改良せしむること」、9番目には「海水浴場の施設は建築物の形態色彩様式等を統一し成るべく全海岸線に亘りて松林の美を隠蔽せざるよう分散的に配列し海岸線より少くとも十間以上後退せしめ面もその建築線を一線上に整頓すること。若し納涼閣等の設備必要なる時はこれを海中に突出せしむるを可とせん」<sup>(19)</sup>と言う。モダニズムを否定しているわけではないが、茶店や料亭は日本風で、風致に調和するようにと、景観上の配慮を強調しているように思える。1933（昭和8）年に公園内に竣工した「海の家」は、西洋風の勾配屋根のデザインで竣工している<sup>(20)</sup>（図20）。大屋霊城の直接的な指示だったかどうか

はわからないが、農業博物館へのスパニッシュ瓦の付加を要望したのは、大阪府公園課の意向が反映されているのではないかと推測できる。

## 5. おわりに

本稿では、富民協会によって浜寺公園内に建設された農業博物館の建築について、不明な点も残るものの、概要とデザイン上の特徴、大阪毎日新聞社あるいは本山彦一との関係を述べた。まとめとして、農業博物館の近代建築史上における価値を改めて整理しておきたい。

### ・初期モダニズム建築として

中尾保といえば、日本のモダン・ムーブメントでは欠かすことのできない運動体である「インターナショナル建築会」の名が頭に浮かぶ。農業博物館は、その主要メンバーの一人である中尾が設計し、実現した建築の一つであり、日本の初期モダニズム建築の一例として見ることができる。

### ・浜寺公園の一施設として

モダニズム建築といえば、矩形で無装飾、地域性に左右されない「インターナショナル・スタイル」と呼ばれるものがイメージされる。農業博物館は、原則、「インターナショナルスタイル」を目指しているが、軒に瓦が付加され、勾配屋根を架した部分もある。設計者にとっては不本意な変更であったかもしれないが、浜寺公園内という立地によるものであろう。大阪毎日新聞社と社長・本山彦一、浜寺海水浴場、浜寺水練学校、浜寺公園、財団法人富民協会、水練学校師範であり建築家の中尾保、…といった様々な人の縁や場所の縁によって農業博物館は実現したと考えられる。

農業博物館は、戦後は閉館し、建物はそれぞれの時点で必要な用途に利活用され、大規模に改変されていたようだ。解体年代も明らかではなく、資料も多くは残されていないが、戦前期の興味深いモダニズム建築の一つ、地域の特色ある建築の一つとして捉えられる。

## 註

(1) 近代建築画譜刊行会編：『近代建築画譜 近畿編』昭和11年（復刻版、2007年、不二出版）、p.281に農業博物館が掲載されている。

(2) 竣工当時、建築専門雑誌に掲載された記事は下記の通りである。

・農業博物館、『建築と社会』昭和8年1月号、p.新7-新8

・財団法人富民協会農業博物館新築工事概要、『建築雑誌』1933年2月号、p.353-354

・農業博物館、『新建築』、昭和8年10月号、p.293-295

(3) 大阪府編：『浜寺公園案内』（リーフレット）、1934年頃

(4) 農業博物館、『新建築』、昭和8年10月号、p.293

(5) 中尾保は『新建築』において日本初と述べているが、「農業」を主題として扱った館としては、伊勢神宮の博物館として、農業館が1891（明治24）年に開館している。

- (6) それぞれの役職については、大阪毎日新聞社編：『大阪毎日新聞五十年』、昭和7年、大阪毎日新聞社による。
- (7) 戦前期までの近代建築を悉皆的に調査して編纂された『日本近代建築総覧』（日本建築学会編、1980年、技報堂出版）にも「羽衣青少年センター（旧農業博物館）」は掲載されているが、備考欄に「改造大」と注記がある。
- (8) 笠原一人：「日本インターナショナル建築会」における中尾保の活動について、『平成15年度日本建築学会近畿支部研究報告集』、計画系、2003年、p.949-952、笠原一人：日本インターナショナル建築会—その理念と活動、京都国立近代美術館監修：『復刻版 インターナショナル建築 別冊』、2008年、国書刊行会、p.116-154、川島智生：日本インターナショナル建築会が遺したもの—科学に依拠したモダンデザインの始点、同上書、p.155-172
- (9) 大阪工業大学学園六十年誌編纂委員会編：『学校法人大阪工業大学六十年史』、大阪工業大学、1982年、p.79
- (10) 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞社浜寺水練学校80年史』、毎日新聞大阪本社、1986年
- (11) 花園ラグビー競技場（京阪神新建築集）、『建築と社会』1930年1月号、p.31、川島智生：近鉄の近代建築②近鉄花園ラグビー場、『近畿文化』No.694、2007年、p.12
- (12) 『建築と社会』1937年6月号、p.9-16。この建物の設計者に関しては曖昧な点もあり、異なる設計者名で記されていることもある。
- (13) 『インターナショナル建築』については、本稿では京都国立近代美術館監修：『復刻版 インターナショナル建築』、国書刊行会、2008年を参照した。以下に示すページ番号は復刻版のページである。中尾保：花園ラグビー競技場、『インターナショナル建築』、第2年1号、1930年1月、p.141-146
- (14) 中尾保談：浜寺海水浴場の将来、大阪毎日新聞社編：『浜寺海水浴二十周年史』、大阪毎日新聞社、1926年、p.233-238
- (15) 前掲書『インターナショナル建築』に掲載された中尾保の作品のうち、海水浴場に関連する作品の掲載号、掲載ページを挙げる。「ある海水浴場会館への試案」：第2年4号、1930年4月、p.226、「水泳倶楽部」及び「水泳競技場」：第3年6号、1931年6月、p.719、「浜寺水泳場飛込台」及び「浜寺水泳場」：第3年7号、1931年7月、p.745-746
- (16) 橋爪紳也：第7章海水浴場の近代—マスコミの湾岸戦略、『海遊都市』白地社、1992年、p.189
- (17) 清水正之：府営公園の120年、大阪府公園・都市緑化協会編：『府営公園の今昔』、大阪府土木部公園課、1994年 p.46
- (18) 大屋霊城：『計画・設計・施工 公園及運動場』、裳華房、1930年、p.290
- (19) 同上書、p.296-297
- (20) 加藤善吉：大阪府営公園とその建築的施設、『建築と社会』1934年4月号、p.49-54において、浜寺公園も取り上げられ、海の家は、「昭和8年度府の予算で大林組によって出来たもので、写真に示した様な軽快な木造である」とある。





図1 正面側外観（『新建築』1933年10月、以下\*印の図は同書に掲載）

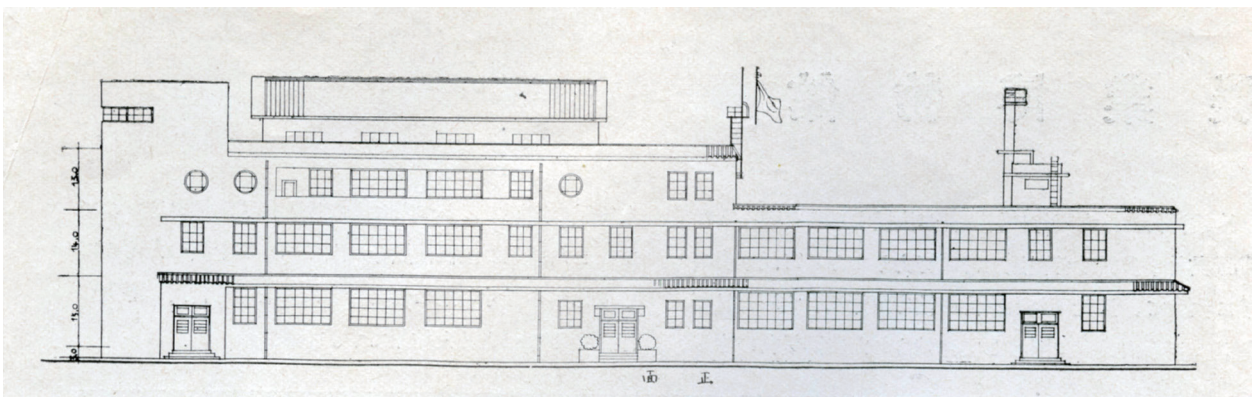


図2 正面図（西立面図）\*



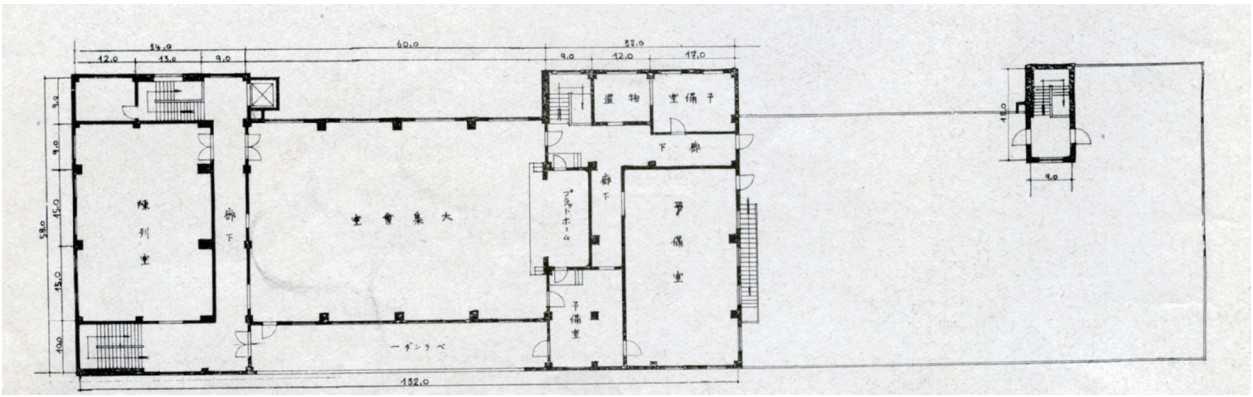


図3 3階平面図\*

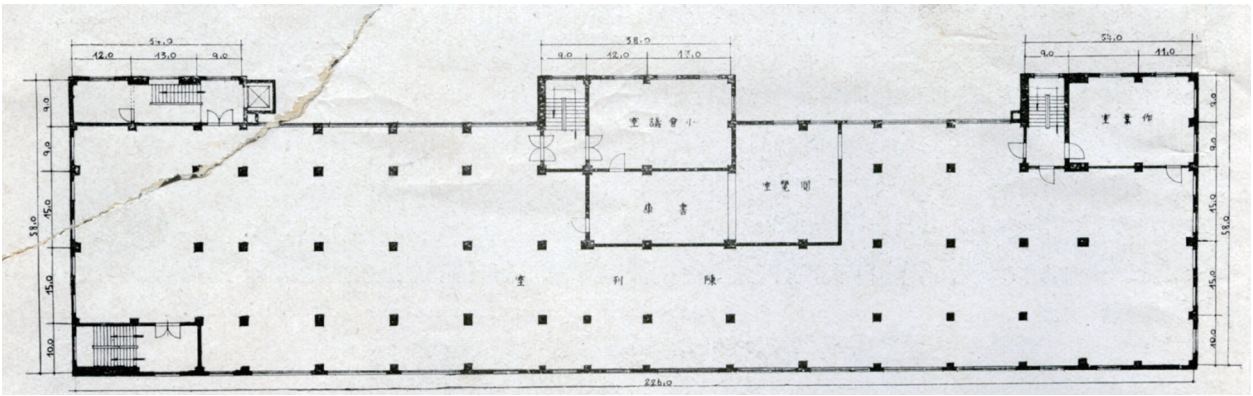


図4 2階平面図\*

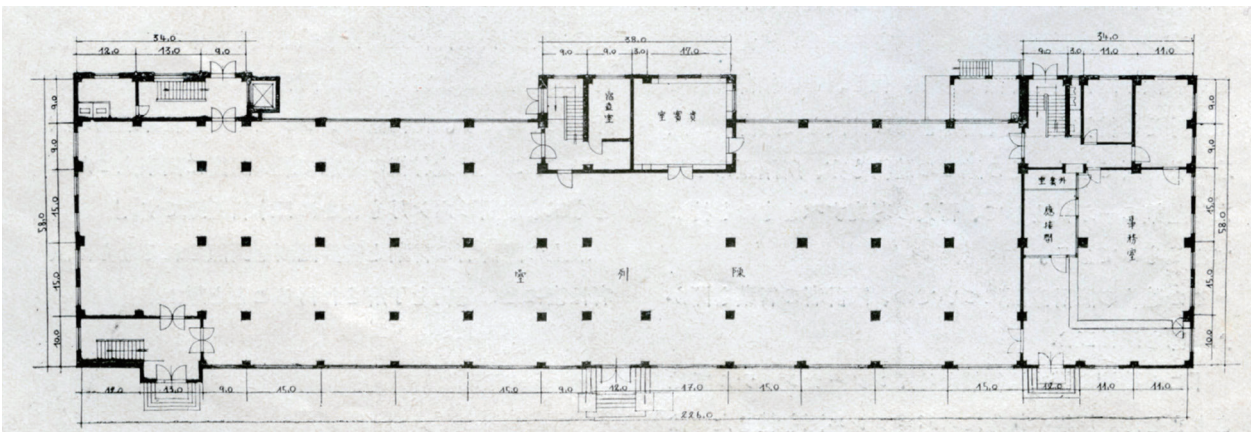


図5 1階平面図\*



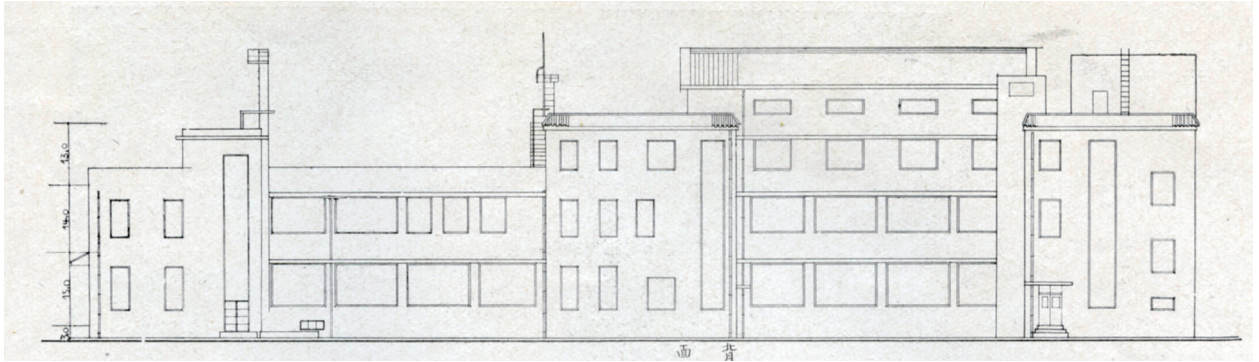


図6 背面図（東立面図）＊

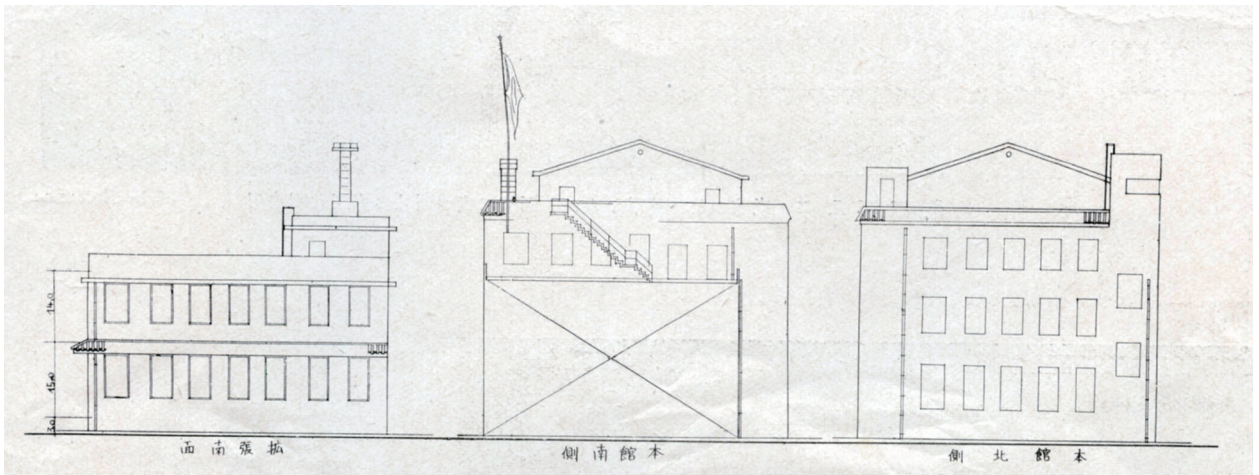


図7 立面図＊



図8 正面入口＊



図9 正面入口前＊ モダンな門柱



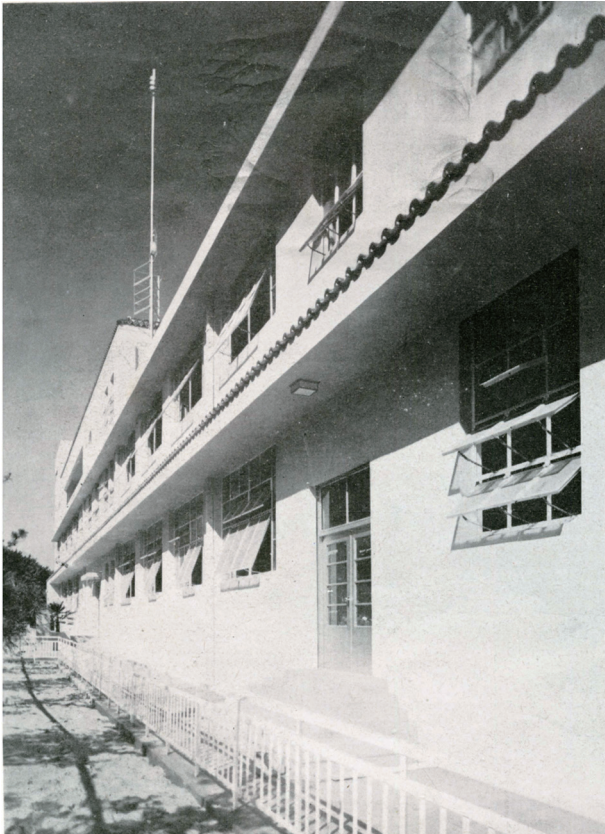


図10 正面斜影\* 1階軒部分に瓦が見える



図11 3階バルコニー\* 屋上への階段はモダニズムの建築らしさがよく表われている。

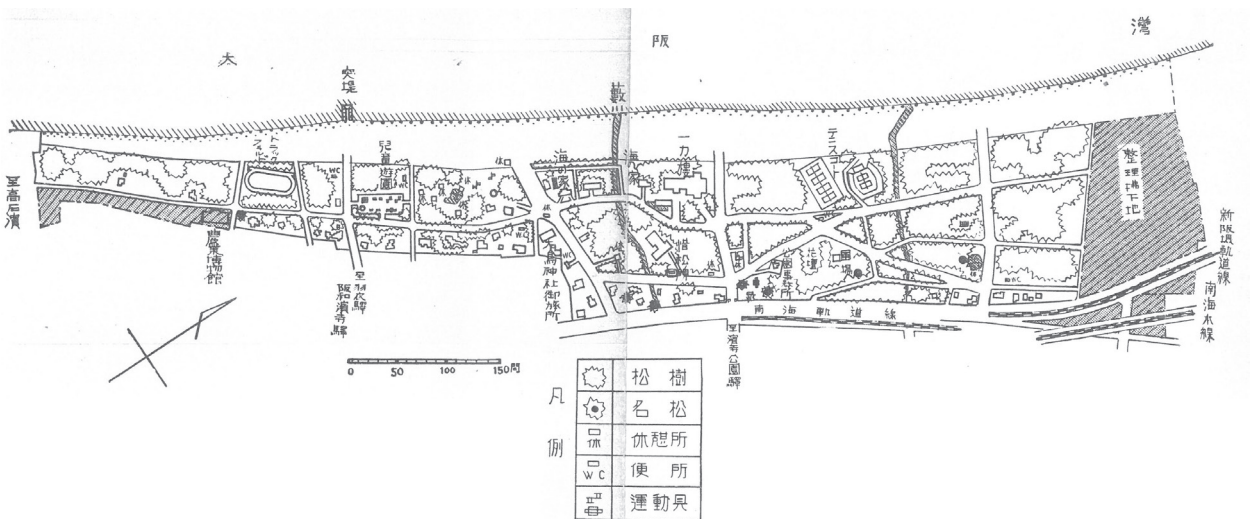


図12 浜寺公園配置図（大阪市立中央図書館所蔵『浜寺公園案内』1936年ごろ）



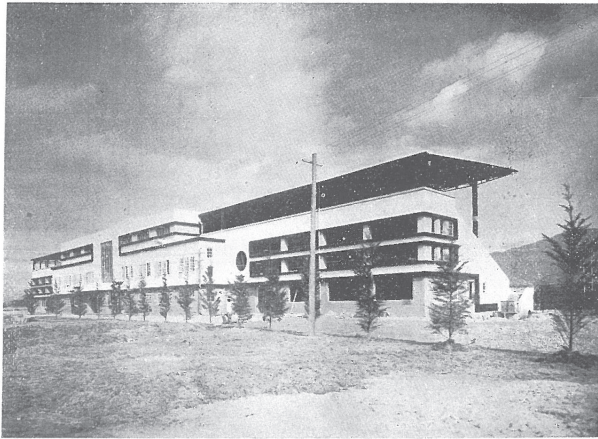
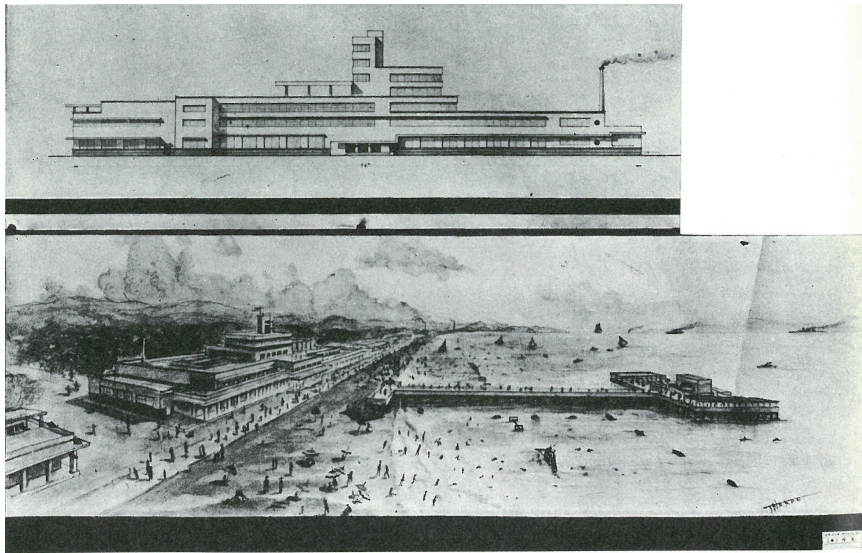


図 13 花園ラグビー競技場(『建築と社会』1930年1月)



図 14 阪急西宮球場(『建築と社会』1937年6月)



17 NAKAOTAMOTU, OSAKA.  
ARU KAISUIYOKUZYU-KAIKAN ENO SIAN  
DESIGAJO PROPONA POR LA KLUBDOMO EN CERTA MARBANEJO.

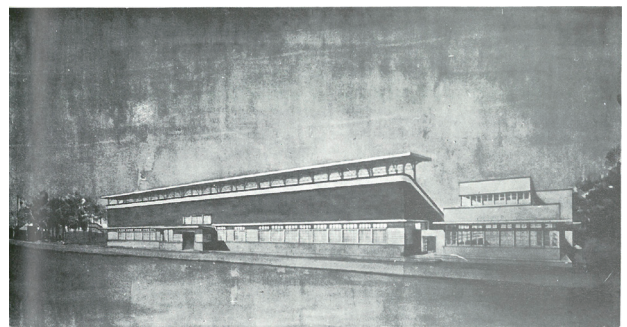
図 15 ある海水浴場会館への試案(『インターナショナル建築』1930年4月)



1

TAMOTU NAKAO, OSAKA  
Klubdomo de Nagehadejo  
水泳俱樂部 中尾保設計

図 16 水泳俱樂部(『インターナショナル建築』1931年6月)



2

TAMOTU NAKAO, OSAKA  
Klubdomo de Nagehadejo  
水泳競技場 中尾保設計

図 17 水泳競技場(『インターナショナル建築』1931年6月)



2

TAMOTU NAKAO, OSAKA HAMADERA Naghadajo, plano  
 濱寺水泳場, 平面, 中尾保設計

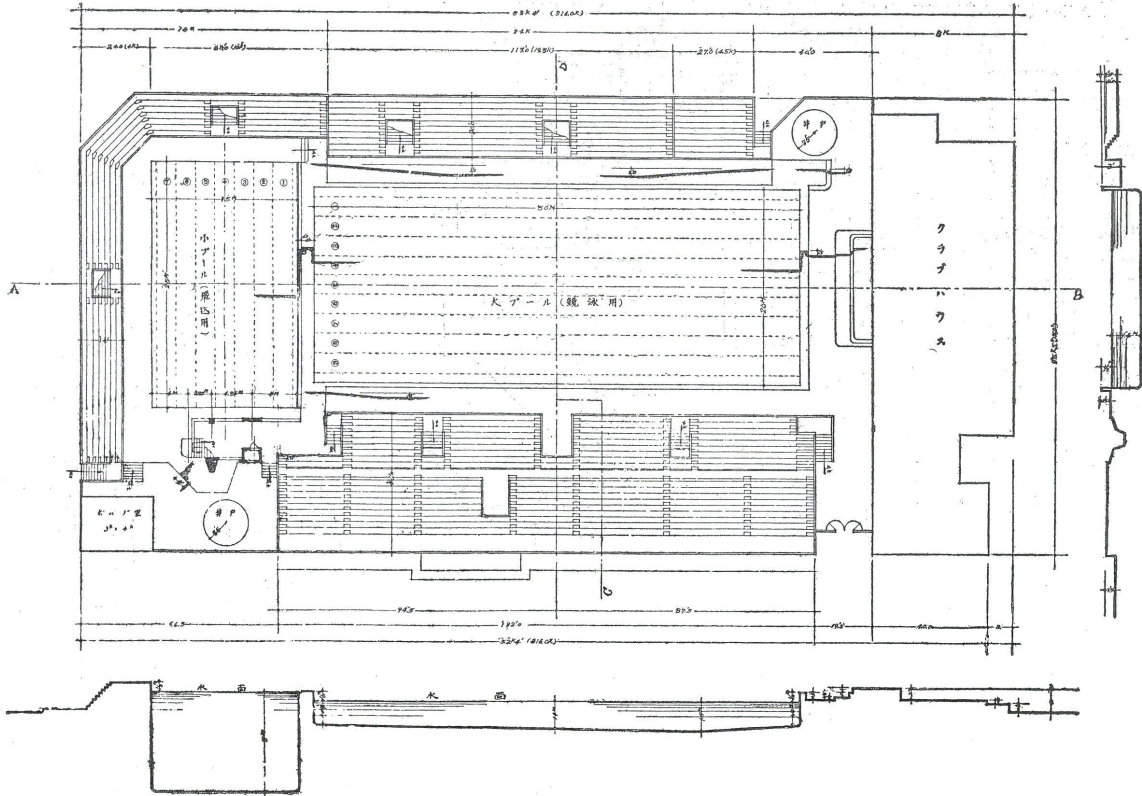
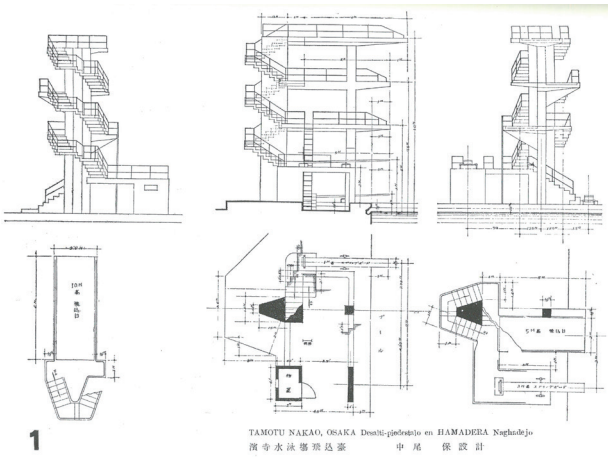


図18 濱寺水泳場 平面 (『インターナショナル建築』1931年7月)



1

TAMOTU NAKAO, OSAKA Deshi-jidojio en HAMADERA Naghadajo  
 濱寺水泳場飛込台 中尾保設計



図19 濱寺水泳場飛込台 (『インターナショナル建築』1931年7月)

図20 濱寺公園内海の家 (『建築と社会』1934年4月)



家農の流上川根利

富民協会十年史挿絵